

2016 年 11 月 28 日発行 第 647 号

CONTENTS

中国経済シンポジウム 2016 のお知らせ	2
経済史シンポジウムのお知らせ	3
読後雑感：2016 年 第 26 回 小島正憲	5
【中国経済最新統計】	17

京都大学 経済学研究科 東アジア経済研究センター (旧上海センター)
Center for East Asian Economic Studies, Graduate School of Economics, Kyoto University

Home 事業概要 組織構成 活動状況 最新情報 会員募集 お問い合わせ

最新情報

- 2014.10.07 【イベント】「中国経済研究会」のお知らせ
- 2014.09.11 【イベント】アジア自動車シンポジウムのお知らせ
- 2014.08.12 【お知らせ】センター協力会の解散と支援会への移行について
- 2014.07.14 【イベント】第10回 アジア中古車流通研究会
- 2014.07.14 【イベント】中国経済研究会 (2014年度第3回)

News Letter

Vol.539
2014.10.06

最新号

バックナンバー

Go more

研究会 シンポジウム・講演会・セミナー 全社説明会 会員募集

寄付のお願い

アクセス リンク集 プライバシーポリシー サイトマップ

Copyright (C) 京都大学経済学研究科「京大東アジア経済研究センター」, All Rights Reserved.

中国経済シンポジウム 2016 のお知らせ

中国経済の安定成長に向けて

主催：京都大学東アジア経済研究センター
共催：人文科学研究所附属現代中国研究センター
後援：京都大学東アジア経済研究センター支援会

時 間： 2016 年 12 月 3 日(土) 14:00～18:00
場 所： 京都大学吉田校舎時計台記念館 2 階、国際交流ホール
使用言語： 日本語、中国語（日本語通訳あり）
参 加 費： 無料

14:00-14:10 挨拶

文 世一（京都大学経済学研究科科長・教授）

14:10-14:30 問題提起：

劉 徳強（京都大学地球環境学堂/経済学研究科教授）「中国経済の動向と課題」

14:30-15:50 講演 I

秦 雪征（北京大学経済学院副教授・院長補佐）「中国経済の新常態と成長方式の転換」

15:50-16:05 ————— コーヒーブレイク —————

16:05-17:00 講演 II

章 政（北京大学経済学院教授・生涯教育学院院長）「中国の農村発展と土地問題」

17:00-17:50 質疑応答

章 政（北京大学経済学院教授・生涯教育学院院長）
秦 雪征（北京大学経済学院副教授・院長補佐）

17:50-18:00 閉会挨拶

宇仁宏幸（京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター長・教授）

18:10-19:40 懇親会

会 場： 京都大学吉田校舎時計台記念館国際交流ホール

参加費： ￥2000 円(東アジア経済研究センター支援会会員は無料、学生は 1000 円)

※シンポジウムの参加費は無料である。準備の都合上、参加ご希望の方は 11 月 22 日(火)までに氏名・所属・メールアドレス、及び懇親会参加の有無を東アジア経済研究センター事務局（ceaes2010@yahoo.co.jp）にまでお知らせください。

経済史シンポジウムのお知らせ

東アジア工業化に関する歴史的研究 —中国と日本を中心に—

主催：科研費 東アジア資本主義史研究プロジェクト
共催：京都大学東アジア経済研究センター
京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター
後援：京都大学東アジア経済研究センター支援会

■日時 2017年3月6日（月）13:00～17:00
■会場 京都大学経済学部第三番教室（法経東館2階）
■参加費 無料

13:00-13:10 開会の挨拶 問題提起

13:10-13:50

久保 亨（信州大学教授）	東アジア工業化の捉え方 中国
堀 和生（京都大学教授）	東アジア工業化の捉え方 日本

13:50-14:10

木越義則（名古屋大学准教授） 中国の貿易

14:10-14:30

富澤芳亜（島根大学教授） 中国の繊維産業

14:30-15:00

加島 潤（横浜国立大学准教授） 中国の鉄鋼業
峰 毅（社会人中国経済研究者 東京大学経済学博士） 中国の化学工業

休憩

15:15-16:00

朱蔭貴（復旦大学教授）	中国経済史からのコメント
丸川知雄（東京大学教授）	現代中国経済論からのコメント
巖善平（同志社大学教授）	中国農業論からのコメント

16:00-17:00

自由討論

17:10-18:40 懇親会

京都大学経済学部みずほホール（法経東館地下1階） 参加費 2,000 円（支援会会員は無料）

***準備の都合上、シンポと懇親会の参加については事前にご連絡ください。**

連絡先 京都大学経済学部 堀和生 hori@econ.kyoto-u.ac.jp

20 世紀 100 年間の世界経済の諸々の趨勢のなかで、最も大きな変化の一つは東アジアの経済的な台頭であろう。19 世紀後半に世界経済は一つに統合されたとされているが、その時点の世界経済のなかで東アジア経済全体の規模、およびその工業部門の比重からみて、その比率は比較的小さなものに過ぎなかった。ところがその後の 1 世紀、とりわけその後半期において工業化が急進展した結果、現在東アジアは従来世界経済を主導してきた西欧、北米と並んで世界経済全体の、そして工業のコア地域の一つに変貌している。これらの巨大な変動は、日本、中国、韓国、台湾等、一つの国や地域だけで起こったのではなかったもので、それらに対する探究は、当然に国民経済だけにとらわれない広い視野が必要である。このシンポジウムは、このような関心のもと、中国と日本を中心とした東アジア的なスケールで、20 世紀におけるこの地域の経済発展、工業化の進展の特質を探究して、その世界史的な意義について考える試みである。具体的には、次のようなことを意図している。

第 1 は、近代中国における工業の分析を軸にして、通時的な発展過程を解明することである。中国経済史では研究の進展にともない、清代、民国期、計画経済期、改革開放期それぞれの分析は深まってきたにもかかわらず、各時代を通した歴史像の構築や発展の理解についてはいまだ十分な関心が払われていないように思われる。ここでは中国経済史の幾つかの分野を取り上げ、とりわけ民国期と計画経済期の関連に注意を払って検討し、改革開放後について展望したい。

第 2 は、このような中国の個性的な発展を、東アジア内で隣接している日本を中心とした地域の発展と比較してみることである。計画経済期に両地域の交流が極端に制限された時代があったとはいえ、その前後のほとんどの時代、両地域の社会経済の結びつきはきわめて強く相互に規定し合う関係にあった。さらにさかのぼれば、近代に至るまでの長い時代、この地域は多くの共通する歴史的条件を抱えていた。戦後のある時期に資本主義世界と社会主義世界という対比が強調されたために、これまで比較史的な認識が弱かったことをふまえ、本シンポジウムでは日本経済史の経済発展、工業化の過程を、意識的に中国の過程と比較して論じたい。

第 3 に、東アジアにおいて、急速に発展する工業部門と膨大な人口を擁する農業部門とが並存したことに注目し、両部門の関連性、規定関係に関心を払う。研究史的に見れば、世界経済と結んで近代化を主導し、また資料が残存しやすい工業や金融等の近代的部門の研究が先行している。しかし、近年研究が進んでくると、アジアの工業化は世界経済との結合関係のみならず、国内の非近代とされる伝統的農業部門のあり方に大きく規定されていたことが次第に明らかになってきた。このシンポジウムでは、東アジアの工業発展を、農業を含めた広い社会経済基盤のなかで捉え直してみることを提起したい。

本シンポジウムがめざすものは、精緻な研究成果の発表ではなく、東アジアの経済発展、工業化をいかに理解すべきなのかという試論の模索である。このような挑戦的な試みは、通常の学会では扱うことが難しいテーマである。関心をおもちの方は、このシンポジウムにぜひ積極的にご参加いただきたい。

読後雑感 : 2016 年 第 26 回

21. NOV.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事
株式会社小島衣料オーナー
東アジアセンター外部研究員
小島正憲

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 1. 「無葬社会」 | 2. 「死なないうもり」 |
| 3. 「年を取るのが楽しくなる教養力」 | 4. 「とらわれない」 |
| 5. 「2025年、高齢者が難民になる日」 | 6. 「長生きしても報われない社会」 |
| 7. 「“上流”老後、“下流”老後」 | 8. 「猿の見る夢」 |

1. 「無葬社会」 鵜飼秀徳著 日経 BP 社 2016年10月31日

副題：「彷徨う遺体 変わる仏教」 帯の言葉：「2030年 孤独死予備軍 2700万人」

著者の鵜飼氏は、昨年5月に、「寺院消滅」という書を出版しており、本書はその続編である。前作では、主に地方の寺院の困窮を描かれていたが、今回の書では、都会の寺院の有様や社会事情が書き込まれている。現代日本の葬儀傾向がよくわかり、参考になる書物である。それでも前作のインパクトがあまりにも強かったもので、若干、物足りない感じがする。

鵜飼氏は、「多死時代を迎え、都会では遺体が彷徨い出している。墓じまいや直葬などの簡素な葬送が増えている。墓や死後世界に関心を持たない人も多い。“無葬社会”は不可避のようにも思える。しかしい、一方で、亡き人を供養したいという根源的なところ、この地球全体の共通意識が社会に潤いと安定を与えてくれるはずだと、私は信じている」と書いている。私は唯物論者であり、無神論者であるから、墓には興味がないし、死後の世界には興味があっても、狂信的なものではなく、冷めたものである。したがって「無葬社会」を是とするものであるし、「亡き人の供養」などしたいと思わないし、自ら亡き人になっても供養してもらいたいとも思わない。今や、人類が未体験の長寿社会に突入しているのだから、新たな死の哲学・宗教が生み出されるべきで、従来からの常識的な思想は捨て去るべきだと思う。私は葬式もしないし、火葬で灰も残さないように完全焼却してもらうつもりである。そうすれば散骨などの手間も省けるだろう。もちろん、それまでに墓じまい、仏壇じまい、位牌じまいなどを終えておく予定である。

鵜飼氏は、「浄土真宗本願寺派が2009年に実施した調査では、村落にある寺院の60%以上が年収300万円以下」とであると、その窮状を訴えており、同時に、「死が逃れようがないが、僧侶が死の意味を説くことができれば、寺院も仏具店も葬儀社もきっと蘇る。1500年、日本仏教の歴史とともに歩んできたモノづくりやサービスの現場にも活力が生まれる。ひいては地縁の回復にもつながる。寺院の盛衰は、多くの業界の命運とともにあることを、仏教界は自覚しなければならない」と書き、僧侶に奮起を促している。

また鵜飼氏は本書で、都会での火葬場不足（順番待ちで1週間という都市もある）、遺体一時預かりホテルの繁盛、多様な永代供養墓、献体の増加、散骨島などを、詳しく紹介している。

2. 「死なないつもり」 横尾忠則著 ポプラ社 2016年10月7日

副題：「80歳の熱き人生を創作完璧をめざすのではなく、あえて未完にする。未完は明日に続くものだから」

本書は、今年で80歳を迎えた画家であり小説家でもある横尾忠則氏の著書であるが、今まで読んできた高齢の芸術家たちの著作と比べて、説教臭いところが少ない。その反面、つかみどころのない本でもある。

本書で横尾氏は、「僕が興味を持っているもの、それは“命”です。いつ死んでもいいなんて、まったく思いません」と書き、「病気や怪我は、変化を巻き起こす風のようなもの。その変化を面白がることで、僕はなんとか生き延びています」、「アイデアは時間をかけてこねくり回すとロクなことになりません。いろいろな価値観に当てはめようとすると、結局、平均的なものにしかならない」、「優等生の作品は、窮屈で、なんだか息苦しい。うまくできたものを壊す勇気があるかないか、結局その時にやらないと、次のチャンスなんて、そう簡単には来ないんだから」と述べている。

3. 「年を取るのが楽しくなる教養力」 齋藤孝著 朝日新書 2016年9月30日

帯の言葉：「ささいなことに人生の幸福を見出す技術、賢者の知恵に学ぶ人生後半の楽しみ方、それが教養だ」

本書を読んでも、「年を取るのが楽しくなる」ことはないだろう。著者の齋藤氏は、まだ50代半ばであり、高齢者の心情を本当に理解するにはまだ若く、それは無理からぬことだと、私は思う。齋藤氏は、「天寿をまっとうするならば、そこから残りの人生は30年、それは“余生”と呼ぶにはあまりにも長すぎる時間です。この残された膨大な時間を生きていくためには、それまでとはまったく違う新し

い人生観が求められます。そこで、私は人生の後半戦を楽しく生き生きと過ごすためのキーワードとして“教養”を挙げたいと思います」と書き出しているが、この文章はなぜか白々しく思える。実際に老境にさしかかった自分からみると、“教養”などと言っても、それは手すさびに過ぎないような気がするからである。

齋藤氏は、「現役を引退したあとなら、生産性や効率性を気にする必要もありません。一つの世界にじっくりと時間をかけて向き合うことができます。また残りの人生の時間を考えると、やりたくないことをやっている暇はないと思うようになります。自分がやりたいことがより鮮明になり、物事の取捨選択がしやすくなるのです」と書いている。たしかにこれは高齢者の一断面を正しく表していると思う。また、「現代の日本社会では、とかく超高齢社会のデメリットや不安ばかりが喧伝されています。しかし、考えようによってはこれだけ文化度の高いものが簡単に手に入る時代に、長生きできるということは、幸せなことだととらえられるでしょう。せっかく長生きするのだったら、一つでも自分が好きなものを増やしたほうが、人生楽しいに決まっています。そのためには、食わず嫌いをしない好奇心や柔軟さを持つこと、好きなものをどんどん増やして、精神のアンチエイジングに大いに励みましょう」書いている。このことにも私は、異論はないが、そこにはなにか物足りなさを感じる。高齢者には、「高齢期を積極果敢に生きよ」というメッセージが必要なのである。私は、「高齢期を楽しく生き、楽しく死ぬ」には、教養ではなく、むしろ「脱教養、脱常識、超革新的創造」が必要なのではないかと考えている。

4. 「とらわれない」 五木寛之著 新潮新書 2016年11月20日

帯の言葉：「心に、自由の風を吹かせよう。 “とらわれ”をときほぐす34話」

いつも五木氏の著書には、新たな視点がありおもしろいが、残念ながら本書にはない。「なおせない。なおらない。ふせげない。この3つの認知症の常識を、私たち現代人はどう乗り越えていくのだろうか。まだ曙光は見えていないようだ。“人生100年時代”というかけ声を耳にするたびに、“科学”、“宗教”、この二つ以外に、なにか新しい第三のヒントはないものかしきりに思う」という五木氏の嘆きの文章のみがむなしく踊っている。

5. 「2025年、高齢者が難民になる日」 小黒一正編著 日経プレミアシリーズ 2016年9月8日

副題：「ケア・コンパクトシティという選択」 帯の言葉：「幸福な老後は、住む“まち”で決まる」

小黒氏を始めとする筆者たちは、本書で、「団塊の世代を中心とした高齢者が終の棲家を求めて“民族大移動”を始めた」、「老後に移住を望む人々の過半数が移住

の条件として“医療・介護の環境”と“商業施設があり買い物が便利”をあげている」と書いている。たしかに最近、高齢者の自動車事故が目立ち、免許の返上が話題となっている。つまり、今までの郊外型一戸建て住居から、今後は自動車の不要な都会の中心へ移動する高齢者が多くなってくることは、間違いないだろう。私も実母が身罷ったら、都会の中心の文化水準の高い地域の、小さなマンションに移住し、それを機会に免許を返上しようと考えている。

筆者たちは、「日本人の最大多数を占める団塊の世代が後期高齢者になる2025年を目前に、政府も地方自治体も、団塊の世代の人々も、“死に場所づくり”と“死に場所探し”に躍起となっている」と書き、「解決の鍵を握るのは“ケア・コンパクトシティ”構想である」、「東京は土地の値段が高いため、介護施設整備費は秋田県のおよそ2倍である。そこで大都市圏の自治体と地方の都市が連携して高齢者の受け皿となるケア・コンパクトシティを地方に開発すれば、大都市は老人ホームを比較的安くつくることができ、地方都市は人口減少の歯止めと雇用創出を期待できそうだ」と述べている。これは地方都市に「姥捨て山」を構築しようという構想であり、一定の評価はできる。それでも、日本が抱えている超高齢社会を解決する決定打とはならないだろう。

筆者たちは、すべての高齢者が、「自宅で家族に見守られながら静かに死にたい」という願望を持っているという前提に立って、ケア・コンパクトシティを構想している。たしかに、現在の高齢者は、「在宅死」を望んでいる人が多い。しかしそれらの高齢者の介護で辛い体験をした団塊の世代は、おそらく「在宅死」を望まないだろう。私は、結果として、家族の生活を犠牲にしてしまう在宅死を望まない。現在の高齢者は、戦前から戦中にかけて、必死で子ども育て上げてきたから、その心の中には、「自宅で手厚く介護してもらって当然」という気持ちがある。そして当の高齢者は、辛い介護経験を持っていないため、それがどれほど家族の生活を悲惨なものにしてしまうかにも、心が至らない。2025年、団塊の世代が後期高齢者となったときは、彼らは飽食の時代を満喫し、核家族を生活を堪能してきており、「自宅で家族に見守られながら静かに死にたい」という願望よりも、むしろ「足腰が丈夫で、認知症にならないうちに、誰にも迷惑を掛けず、一人で静かに死にたい」という願望を持つようになるのではないかと思う。またそのような哲学・思想・宗教を確立すべきである。

団塊の世代の民族大移動は、これから、おそらく2段階を経るのではないかと思う。第1段階は、足腰が丈夫で、認知症になる前、つまり自分のことが自分で始末できる段階までは、都会へ集中。第2段階は、自己決定力がなくなり、他者に依存しなければ生活ができなくなったとき、地方へ拡散。ことに第2段階での移住先

は、本当に「死に場所」となるだけなので、そこは海外でも構わない。そのときは医療も介護も必要がないからである。私は、日本国内にも、そのような高齢者を積極的に受け入れる「姥捨て山特区」を作るべきだと考える。

筆者たちは、「韓国、台湾、中国など他のアジア諸国は、高齢化のフロントランナーである日本が進む道を注視している。高齢者の団塊が我が国を覆う2025年まで残された時間はわずかである」と書いている。それでも私は、焦ることはないと考えている。必ず私たち団塊の世代が、モデルケースを作り上げて死んでいくからである。

なお、本文中に、「岐阜市にもケア・コンパクトシティのモデルがある。JR岐阜駅の駅前開発事業だ。48階建てタワーマンションのなかに診療所や有料老人ホームなど高齢者に必要な機能を組み込んでいる。各種生活サービスをコンパクトに内包した建物に対する住民のニーズは高い。まちづくりは平面的な広がりの中で構築されてきたが、このケースは必要な機能を同一の建物のなかに積み上げ、雨や雪など天候に左右されず診療所やデイサービスに通うことができる。ヨコのものをタテにして機能をコンパクトに収めたという発想の転換を評価したい」という記述がある。実は、このタワーの老人ホームとデイサービスに、私の実母がいつもお世話になっている。ここに書かれているように、そこはとてもよい環境である。ただし金銭面の負担は大きい。

6. 「長生きしても報われない社会」 山岡淳一郎著 ちくま新書 2016年9月10日

副題： 在宅医療・介護の真実 帯の言葉：「大往生どころか普通に死ねない」

本書もまた、多死社会を迎えようとしている日本を憂う書である。山岡氏は本書で、「長生きするのが心配でならない。その不安を少しでも和らげようと現場を訪ね、地域から自治体、国、日本の国際関係へと問題意識の同心円を広げてみた。そうすると一つの価値観にぶつかる。“金の切れ目が命の切れ目”を是とする考え方である」と書き始め、「資本に食われる医療」という章で本書を閉じている。これに対して私は、「死は何人にも平等に訪れる。いかに金を積んでみても、死から逃れることはできない。遅いか早いかの差だけである。死に対しては、金が無くても積極的に向き合うことが可能である。ここには資本主義の論理を超越した思想・哲学・宗教が有効なのである」と、考える。「金万能の資本主義の論理では、未曾有の多死社会は乗り切れない。

山岡氏は、「50年後には、条件が整えば、死に際を、あれこれで選べるかもしれません」と、死に方の多様性の可能性を示唆しているが、私は、もっと早く、10年後には、それが実現すると考えている。まさに多死社会がそれを必要としてい

るからである。山岡氏も、現在の多くの高齢者が、「住み慣れた場所で、安心して最期まで暮らし続けたい」という願いを持っているということを前提にして考えているが、団塊の世代が後期高齢者になるころには、その常識は覆っているだろう。「孤独をこよなく愛し、誰の手も煩わせず、誰にも看取られず、敢然として自らの生を閉じていく」ことが、日本人の美として認識され、常識化されていくに違いない。そのような思想を・哲学・宗教を、私たち団塊の世代が、世界に先駆けて形成していく決意である。私は今、その準備にとりかかっている。

山岡氏は、「死が迫った人間は煩悶する。どうして自分はこんな病気になってしまったのか。自分は何のために生きているのか。なぜ自分だけがこんなに苦しめられるのか。死んだらどうなってしまうのだろう。怖い。もう2度と家族とは会えなくなってしまう。もはや何の希望もない。早く死んでしまいたい…。そんなスピリチュアルな痛み（ペイン）は、霊的、宗教的といった範疇を超えて、終末期の患者に襲いかかるのである」と書き、「患者自身が援助者との“対話”を通して、死をも超えた“将来”や“他者”、はるかな“自己決定の自由”を獲得できれば、死の床にあっても新たな生きる意味や価値を回復できる」と述べ、「対話」の重要性を強調している。

7. 「“上流” 老後、“下流” 老後」 プレジデント：11／14号特集

副題：「人生後半に破裂する“超”巨大爆弾&防御法」

本誌は、単行本と違って、読者の興味を惹くような記事ばかりで、やはり中身が薄いような気がする。この特集の最初の「金持ち県民、貧乏県民ランキング」などという記事などは、あまり老後とは関係がないと思う。それでも、つつい「自分の住んでいる岐阜県は？」などと目がそこに飛んで行ってしまった。それが雑誌の魅力なのだろうか。本誌で参考になったのは、「本当に必要な”クスリ、手術“の選び方」という記事である。週刊誌でも大ブームになっているが、本誌では比較的冷静に、この問題を扱っている。なお、「人と医療の付き合いはリスクと恩恵の損得勘定の連続だ。生まれてすぐのワクチン接種から始まり、感染症、胃腸障害、ときに精神疾患、生活習慣病…。計算の難易度は加齢に応じて上がっていく。そして最後には、脳・心疾患やがん治療での損得勘定と一番大きな”治療の引き際“が待っている。バランスのとれた着地点はどこか。近視眼的な恩恵を優先するのか、遠い将来の時間を今の苦痛で贖うのか。いつ損得勘定を手放すのか。日々の医療との付き合いのなかで考えていくしかなさそうだと、この特集の最後が締め括られている。

8. 「猿の見る夢」 桐野夏生著 講談社 2016年8月8日

帯の言葉：「還暦、定年、老後。夢見た一流の人生が始まる、はずだった…。あの女さえいなければ」

少々風邪気味で、なんとなく体も頭も重かったので、気晴らしに、この小説を読
んでみた。帯には、桐野氏の自筆で、「これまでで、一番、愛おしい男を書いた」
と書いてあったが、私には「しょせん男なんてこんなもの」とせせら笑っているよ
うな桐野氏の顔が目に浮かぶ。本文中でも、桐野氏は、「男は女に縛られると、自
由が欲しくなって飛び出し、自由を得た途端にまた女が欲しくなる。馬鹿な動物な
のだ」と書いている。私自身も同感で、この歳になって、つくづく、「男は馬鹿な
動物だ」と思う。いずれにせよ、本書での、桐野氏の人生の晩年にさしかかろうと
する男性の心理描写は、実に上手くて面白い。

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^F 元)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014 年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
9 月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10 月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11 月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12 月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015 年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1 月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2 月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3 月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4 月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5 月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6 月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7 月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8 月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9 月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10 月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11 月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12 月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016 年												
1 月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2 月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3 月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7
4 月		6.0	10.1	2.3	10.1	456	-2.0	-10.5	21.4	2.9	12.8	14.4
5 月		6.0	10.0	2.0	7.4	500	-4.7	-0.1	43.6	-4.8	11.8	14.4
6 月	6.7	6.2	10.6	1.9	7.3	479	-6.1	-9.0	8.5	4.4	11.8	14.3
7 月		6.0	10.2	1.8	3.9	502	-6.4	-12.9	-3.8	-6.2	10.2	12.9
8 月		6.3	10.6	1.3	8.2	520	-3.2	1.4	13.2	0.5	11.4	13.0
9 月	6.7	6.1	10.7	1.9	9.0	420	-10.2	-1.9	27.9	-3.6	11.5	13.0
10 月		6.1	10.0	2.1	8.8	491	-7.4	-1.2	-39.6	0.4	11.6	13.1

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、() 内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。